環境実践事例集３２

みんなの環境　わたしたちの実践

本実践事例集は、各学校における環境教育の一層の推進を目指し、県内の優れた実践を紹介するものです。
掲載校は、第１７回群馬銀行環境財団教育賞において最優秀賞に選ばれた学校です。
群馬銀行環境財団教育賞は、群馬県環境教育賞（平成５～１９年度）を引き継ぐ形で、平成２０年度から実施されているものです。

実践事例

１　小学校における実践

桐生市立西小学校　「自らの課題を見つけ、何をすべきか考え、動き出そうとする児童の育成」
－学校と家庭・地域が連携した環境教育の実践を通して－

２　中学校における実践

明照学園樹徳中学校　「探究学習 in 尾瀬2024
文化祭での探究活動からの発展・現地の声を聴こう」

３　高等学校における実践

群馬県立藤岡北高等学校　「藤岡市における都市公園及び桜山公園の調査研究活動」

令和７年３月
群馬県教育委員会

小学校における実践事例

桐生市立西小学校

１　活動名「自らの課題を見つけ、何をすべきか考え、動き出そうとする児童の育成」
－学校と家庭・地域が連携した環境教育の実践を通して－

２　環境教育としてのねらい

近年の地球温暖化等により、自然災害の被害が拡大しているとされる状況等を踏まえ、子どもたち自身が「自分たちが、できることは何かないか？」といった問題意識を自分事化するためのキーワードとして、「環境」に視点をあて、「自らが考え、小さなことから動き出そうとする！」ことができる児童の育成をねらいとしました。

活動は、新たなものや奇抜なものでなく、既存の学校活動を生かし、活動自体が目的とならないように、しかも、できるだけ身近な活動であることとしました。子どもたちには、活動の本質（ねらい）をじっくり考える場（事前、事後）の設定をしたり、保護者や地域の方等、世代間交流の機会を設けたりして、それぞれの立場の方と共通テーマを「環境」として、つなぐこととしました。「環境」をより身近なものとして捉え、まずは関心をもってもらい自分事化できるようにしました。

また、家庭や地域ボランティア、専門家と連携し活動することで、子どもたちは、「環境学習」を通して、多くの人とつながることの大切さやそこでの学び、自分とは異なる考え方や価値観に触れることができると考えています。

３　学校及び地域の環境の状況

本校は、桐生市の中心市街地に位置し、校区にはＪＲ桐生駅や上毛電鉄西桐生駅、商店街、高校、大川美術館等があり、織都桐生のおもむきを感じる街並みも散見できる地域となっています。学校の北側には、吾妻山、水道山があり、自然も豊かな環境で、昨年度 150 周年を迎えた歴史のある小学校です。昭和 20 年代、多いときは児童数が 2000 名を超えることもありましたが、近年は、少子高齢化の影響で、現在（5/1 現在）は 202 名、10 学級と小規模校となっています。地域の方や保護者の多くは、本校卒業生で、学校に愛着をもっている方が多く、学校の取組には大変協力していただいています。

４　活動の内容

１）花壇での花や野菜の栽培

敷地内の花壇を活用して、季節に応じた花や野菜を栽培しています。本校では、野菜の収穫体験や水やり当番としての活動で終わるのではなく、子どもたちには、学校に花壇がある意味から考えさせています。発達段階にもよりますが、多くの子どもたちには、花を見ることで得られる「癒やし」や「心の豊かさ」などを感じてもらえていると思います。また、夏野菜（きゅうり、なす、トマト、ピーマン等）を中心に収穫した野菜とスーパーの野菜（規格品）との違い（大きさ、形、虫食いなど）から考えるその原因であったり、廃棄野菜、農薬・科学肥料、価格（温暖化、気象変動の影響）、食育などと関

連づけたりして、考えることも可能です。

　これらの活動自体は、おそらく多くの学校でも行われていると思われますが、子どもたちに「環境の視点で、なぜ？」を考えさせることで「自ら課題を見つけ、何をすべきか考え、動きだそうとする児童の育成」に向けた活動となると考えています。

２）ＰＴＡ奉仕活動（親子清掃）、地域ボランティア清掃（プール清掃）

　本校では、子どもたちと保護者のボランティアが運動会前の休日に集い、校庭等の清掃を行う活動が長年続いています。また、児童数が減少し、少人数では困難であった夏のプール開き前の清掃も近年、地元の消防分団の方々にご協力いただき、子どもたちとともにプール清掃をしています。これらの活動は、単なる環境美化・清掃に止まらず、子どもを中心に、学校が保護者や地域をつなぐコミュニティーの中核を担うという意味合いをもっていると考えています。これからも学校は、人がつながるしくみを構築し、心をつなぎ、子どもたちを含め、すべての参加者が奉仕（ボランティア）活動をやり遂げる達成感を共有し、自己有用感を高める活動となるようにしたいと考えています。

３）地域ボランティアによる水稲栽培、環境教育出前講座

　５年生の総合学習の時間に水稲栽培（田植え、稲刈り体験）を設定しています。この活動は、地域の「西地区生涯学習を考える会」の方々を中心に、本校の保護者ボランティアにもご協力いただき行っているものです。子どもたちにとって、単なる田植え、稲刈りの体験で終わることなく、児童の職業観や、高齢化による担い手不足や休墾地の問題等についても考える機会となるような活動としたいと考え、実施しています。また、自然環境の保護の視点から、田んぼの生物、昆虫観察、害獣除けの柵から、子どもたちが何かを考える機会となればとも考えます。

　収穫後は、地域の行事として餅つき大会を実施することで、地域の方と収穫の喜びを分かち合い、世代間交流することで郷土理解、愛郷心を育てる機会としています。

　さらに、５年生の総合的な学習の時間では、市内にある群馬大学次世代モビリティ社会実装研究センターと県立桐生高校（ＳＳＨ：スーパーサイエンス・スクール）の２年生探究学習の出前授業と連携し、「地域力による脱温暖化と未来の街～桐生の構想～」をテーマに、子どもたちは、電気自動車ＭＡＹＵに試乗体験した後、温室効果ガス、CO_2 の削減のために私たちにできることについて考えました。

５　成果と今後の課題

１）成果

○　児童の活動へのかかわり方について

さまざまな体験や経験の中での子どもたちのつぶやきや発見、発想の広がりは、私たち教師の想定を超えることがあります。水稲栽培では、田んぼの昆虫から病害虫駆除、環境問題、食の安全について話題になることもあります。野菜づくりでは、店の商品と自分たちが育てた野菜の違い(規格外)から「消費者として何を望むか？」「実や花以外も活用できないだろうか？」など、教師が子どもたちの気づきを膨らませる問いを投げかけることで、子どもたちは、しだいに「自分事」として考えるようになり、活動は少しずつ主体的なものになっていく様子が見られるようになったと考えています。

○　活動の地域への広がりや地域との連携について

「環境教育」をキーワードに、学校が地域に開かれた教育課程を実践することで、さまざまな分野の専門家や協力者が集まることを実感しました。今年度に入って、東京から移住してきた元高校の理科教員の方が理科実験支援ボランティアを申し出てくれたり、夏季休業中の自由研究の支援を申し出てくれたりしました。子どもを中心に学校に関わる人たちが「当事者意識」をもつことで、学校だけではできないことも可能になることが期待できると思います。今後も、支援者の輪が広がり、魅力的な人材やキャリアをもった方が集うことが期待できると考えています。

○　現在までの成果について

子どもたちは、地域に見守られ、家庭や教員以外にも多くの大人と関わることで健やかに成長しています。特徴的であるのが、昨今、社会問題となっている不登校児童が少ないということです。大人と会っても元気にあいさつができる児童も多く、様々な活動の中で、新たな発見や、気づきを素直に言葉に出すこともできます。学校では、子どもたちが感じた「不思議なこと、驚いたこと」から好奇心をもたせ、学びや成長につなげる支援を今後も行っていきたいと考えています。

２）課題

○　社会の急激な変化やいじめ、不登校、少子化、価値の多様化、メディアコントロールなど、学校だけでは対応しきれない問題が山積しています。多くの課題解決には、これまで以上の家庭・地域の協力・連携が欠かせないと考えます。子どもを中心に、地域コミュニティーが形成されるように、学校はこれまで以上に家庭・地域に協力を呼びかける必要があると思います。今回は、学校と家庭・地域をつなぐ、キーワードを「環境」としましたが、今後は築き上げた関係性を強みとして、子どもたちの教育環境の整備に努め、健全育成にあたりたいと考えています。

中学校における実践事例

明照学園樹徳中学校　中高一貫コース

１　活動名「探究学習 in 尾瀬 2024　文化祭での探究活動からの発展･現地の声を聴こう」

２　環境教育としてのねらい

生徒の生活区域から車で数時間のところにある尾瀬は「有名な観光地」として「知っている」が、現状の問題点までは目を向けてはいません。豊かな自然を愛する人間達が、いつしか自然に影響を与えてしまったことに人間も自然界の生き物の一員として、何ができて、何をしてはいけないのかを「尾瀬」という１エリアに注目し、現地に入り、現地の方の声を聴くことで、「環境」という大きな問題を捉える一つの入り口にしたいと考えました。

３　学校及び地域の環境の状況

本校は、市役所や文化センター、各路線の駅も徒歩圏内という市街地にある。また、地域内の幼小中高大学などが各校の特色ある教育活動をしている活気のある教育環境の中にあります。本校は、中高一貫校として６年間を見通した教育活動を行うことができます。一方で桐生市は、かつて主要産業であった織物業の変遷や、山に囲まれた自然豊かな立地により、地域の魅力を生かしながら、人口流出の防止や新たな活性化策に力を入れています。

４　活動の内容

１）　文化祭での各学年におけるＳＤＧｓの取り組み

令和６年度の文化祭では、一貫校の１年（中１）から６年（高３）までの各学年がＳＤＧｓをテーマに探究発表や体験等を提供しました。各学年のテーマは次の通りです。

１年「ＳＤＧｓ について遊びながら学ぼう」　２年「桐生におけるＳＤＧｓ」
３年「お化け屋敷風ゲームラリー」　４年「ＳＤＧｓ　ｅｃｏロード」
５年「ＳＤＧｓキッザニア」　６年「探究型プロジェクト月の光」

代表して第２学年の取組を紹介します。

「桐生のＳＤＧｓ」というテーマに向けて「地域活性」「食」「河川」「ジェンダー」「ゴミ」「人食いバクテリア」「織物」の７つの班に分かれて探究活動を行いました。各班は、テーマについての現状を想像し、ＰＣや資料を使って調べ学習をするだけでなく、疑問や予想を持って現地を視察に行くことを重視し、具体的な問題点を探っていきました。今回の探究活動で大切にしたことは、実際に現地へ行って自分たちの目で見てくることです。具体的には、地域の文化財や飲食店、河川敷や商業施設等を視察して取材したり、教育委員会や河川事務所でインタビューしたりするなど、現実に触れて現状を把握することです。その上で、何が起こっていて、どのような問題があるのか、何が必要なのか等を考えることでした。現地では、想像していなかった実態があったり、新発見があったりしました。生徒たちは、この経験から、実際に体験してくることの大切さを実感していました。

２）尾瀬探究

片品山岳ガイド協会が中心となり、現地の問題を提示していただきました。その中から「木道」「鹿」「トイレ」「魅力度」の４つの問題について解決の提案に向けて探究活動をしました。2 年生が文化祭の経験を活かして、今回は１年生を交えて合同の 10 班をつくりました。事前調査などの後、現地視察では山岳ガイドに同行していただき、課題に合わせた現地の案内やガイドへの取材等を通して活動をしました。さらに、片品山岳ガイド協会に対する提案発表会を行い、講評や提案を頂いた内容をさらに追求して報告資料にまとめ、片品山岳ガイド協会に提案しました。発表会や講評を通して、４つの問題に対する提案は、相互に関係していることに気付く結果になりました。

写真１　尾瀬で山岳ガイドに取材している様子

具体的な「Ａ問題点」「Ｂ原因」「Ｃ解決方法案」「Ｄ今後の課題」は以下の通りです。

①「木道問題」

Ａ　木道が壊れている。滑りやすい。人が少ない木道は修理できず、怪我につながる。

Ｂ　木道は十数年で腐ってしまう。木材を運ぶヘリコプターの費用が高い。人手不足。

Ｃ・『木道清酒』をヒントに、『木道〇〇』ブランドの食品や、世代別でリサイクル可能な使い切りグッズで、何回も買ってもらうような商品をつくり、全国のコンビニで販売することで、尾瀬の周知と資金の収益を図る。

・尾瀬ツアーを企画：参加費を資金源に、木道設置体験イベントを開催する。

・自然に溶け込むデザインのロープウエイや空飛ぶ車など、木道以外の移動手段をつくることで、木道を歩かなくても尾瀬を楽しめるようにする。

・ＩＣＴによる管理システムの活用や情報発信により、人材に頼らない安全管理や情報提供を行う。

Ｄ　イベントや販売が軌道に乗らないと資金が集まらない。どのような企画が集客に繋がるかを検討し続ける必要がある。

②「鹿問題」

Ａ　尾瀬に入山する鹿が増殖し、植物を食べるなど生態系や景観を壊している。

Ｂ　日光地域で越冬していた鹿が、日光で爆発的に増加し、食べ物を求めて尾瀬に来た。

Ｃ・第２の鹿公園をつくろう：尾瀬公園を散策した流れで、鹿公園に誘導し、ふれあい体験や餌やりイベントを開催。子供の入園料は無料で、どんぐり 10 個で 50 円に換算して使える。どんぐりは鹿の餌になるなど、集客のための魅力つくりと、資金集めのための工夫をする。

・人間と鹿の共存できる尾瀬のために鹿’ｓエリアと自然エリアの棲み分け：日光に近い一の瀬からあやめ平あたりに、柵等の人工物ではなく、鹿が嫌いな植物で尾瀬との境界線を作り、尾瀬の景観も守り、鹿のストレスを緩和し、日光にも帰り易いようにする

・スーパーモンスターアニマル計画：景観を壊さないように空から、鹿の嫌いな音や香りで、優しく近づけないアニマル型ロボットを開発し、設置する。発見した人にはポイントゲットで尾瀬グッズプレゼント。

D　初期整備の費用がかかる。クラウドファンディング等で周知を兼ねて資金を募るなどの工夫が必要。広大な敷地が必要。国立公園に植物を植えるには許可が必要。

③「トイレ問題」

A　施設料 100 円を払わない人が 7 割。浄水装置やトイレの維持管理ができない。

B　トイレにお金を払わないのが当たり前に思っている人が多い。管理費がどのように使われているか知らない人がいる。

C・施設料を入れた人へ音姫代わりに素敵な音楽を流す。入れなかった人へ帰りに入れたくなる工夫をするなど、アミューズメント性を加え、お金を入れたくなるようにする。

・尾瀬の現状を知らせるポスターや文章や図をトイレに設置する。トイレの環境への影響や、汚水を乾燥させてヘリコプターで処理施設まで運搬していること。その費用を使用者がわずかずつでも分担することで、尾瀬を守る感覚で入れて欲しいという、心に響く内容で伝える。

D　トイレは無料という感覚を、どこまで払拭できるか。お金を入れることで、入れた人が納得や満足できるかを検証しながら作戦を変更していく必要がある。

④「魅力度問題」

A　日帰りがほとんどで、山小屋や売店の利用者が激減。

B　観光客のほとんどが 70 代で、宿泊を行程に入れることが体力的に厳しい。若者層に尾瀬の魅力が伝わっていない。宿泊費や売店の商品の値段が高い。道のりが長く、足場が不安定なため、入山を希望する人や入山可能な人が減った。歩荷さんの負担が大きく、人員が不足している。

C・ヘリコプターサービスで楽しく観光：足が悪いや体力の問題等で敬遠している人でも、ヘリコプターで空中から景色を楽しみながら、楽に尾瀬に入ってもらう。

・登山だけじゃない尾瀬：印象に残るイメージキャラを制作して広報活動をする。尾瀬の魅力を伝える映え料理を提供し、ＳＮＳにアップしてもらえるようにする。お土産のレパートリーを増やし、ＳＮＳや報道で見た人が、尾瀬に買いに来たいと思ってもらう。写真コンテストやお祭りなどの体験イベントを企画する。

・尾瀬に人を呼び込む方法：ガイドさんなしでも楽しめる、自然に溶け込むデザインの音声画像ガイドやモニターの設置をすることで、歩くだけではない尾瀬公園の魅力を知って楽しんでもらう。尾瀬ならではのグッズの商品開発。

・歩荷さんの負担軽減の工夫：荷物を交代できる中間地点を設ける。

D　ヘリコプターの費用が割高なので、低く抑えるために、複数人数で乗り込むことで人数割りにするなどの工夫が必要。ＳＮＳに乗せてもらうまでの発信が必要。音声ガイドなどのネット環境の整備。

５　成果と今後の課題

１）成果

ネット環境が整い、いつでもどこでも情報を収集できるような一見便利な状況にある中学生たちは、受け身の学習が多く、自ら疑問を持つ経験が少ないと感じています。今回の活動を経験したことで、身近な生活や環境、自然や産業について自分事として考えるようになったことを、活動中や日常生活での会話から感じています。また、自分の考えを持ち、それを他者へ伝え、さらに互いにフィードバックをして高めていくような会話が見られるようになりました。特に２年生は、１年生の時から行っているグループ活動により、探究やグループ学習の基盤をつくっており、６月の文化祭での探究や発表を経て、尾瀬の１，２年縦割りグループではリードしていく活動に自信を付け始めています。

生徒たちは文化祭で地域の方や現地へ出向くなどの活動をしたことで、調べ学習を超えた活動に、発見や意義があることを実感していました。その経験が土台になり、尾瀬探究でも「現地に行くこと」「実態を見てくること」「ネイチャーガイドから実際の話や意見を聞けること」に期待し、具体的な活動をイメージして意欲的に活動していました。ガイドとの積極的な交流で、ガイドから「こんなに調べて、疑問を持って、質問されたことはない」と喜びの声をもらうほど、気持ちを通じさせることができていました。生身のコミュニケーションが少なくなっている生徒たちにとっては、探究以上の経験ができ、さらなる交流への意欲に繋がっています。

写真２　山岳ガイドを招いての提案発表会の様子

２）課題

「尾瀬」探究に関しては、発表時のセッションやアドバイスを経て、探究を深め４つの問題に対して具体的な報告書を作成して尾瀬に提案することで、継続的に地域と関わることができました。また、本校では隔年で尾瀬を訪れており、間には「富士山」の体験が入っています。生徒だけでなく、教職員の引き継ぎも行ってきたので、次の学年は今年度の成果と課題を意識してステップアップして欲しいと思います。

また、２年生は文化祭で探究した「桐生」の「ＳＤＧｓ」から発展させて、桐生市の活性化に向けた提案をすることで、さらに地域との繋がりを持たせ、地域を愛するとともに応援される人間に成長させたいと思います。

また、社会科で「過疎地域」の地域活性化に取り組んだり、全校生徒が日替わりで地域の落ち葉清掃をしたりするなど活動は広がっています。

今後も様々な状況設定から、柔軟な発想ができる学習環境を提供し、大人の常識では生まれない発想力を身につけて、実社会に生きる自分の役割や存在意義を感じ、生き生きと活動できる生徒を育成したいと思います。ご協力頂いている各方面の皆様に感謝いたします。

高等学校における実践事例

群馬県立藤岡北高等学校
環境土木科　ガーデニングコース

１　活動名　　「藤岡市における都市公園及び桜山公園の調査研究活動」

２　環境教育としてのねらい

公園（Park）は、都市公園法および自然公園法に基づいて整備されており、私たちにとって最も身近な緑であるとともに、防災・交流の場・景観形成など重要な都市機能を有しています。しかし、藤岡市における都市公園は 1980～1984 年にかけて一斉に設置・整備されており、設置から 40 年経過した公園は老朽化や整備費の減少などによるストックマネジメントが課題となっています。そうした現状に対して、調査研究や生徒を主体とした公園の在り方を地域と議論する協議会の設立を計画し実施しました。農業科における学習で身に付けた知識・技術を活用し、これからの時代に求められる公園の在り方の提案を通して、生徒主体の活動により身近な自然環境を保全することが目的です。

３　学校及び地域の環境の状況

ガーデニングコースでは主に造園に関する学習を行っており、科目「造園計画」において公園や緑地の学習をしており、身に付けた知識・技術を地域に還元する活動を行っています。藤岡市には、日本を代表する文化遺産である「高山社跡」や、国の名勝及び天然記念物である「フユザクラ」の名所である桜山公園など、国を代表する文化財があります。また、県内外から多くの方が訪れる「ららん藤岡」があり、藤岡北高校はそれらの地域資源に囲まれた位置に所在しています。

しかし、公園や緑地に目を向けると、整備不足や利用者数の減少により身近な緑地としての公園の役割を果たしていない現状があります。また、フユザクラの名所である桜山公園においても利用者数のピークであった 1995 年の 21 万人に対して、2019 年は７万７千人となるなど減少が顕著であり、あらたな魅力の創造が急務です。

４　活動の内容

１）　藤岡市の都市公園調査活動

①樹木調査

公園の現状を把握するため樹木調査を実施し、植栽されている樹木構成について調査分析をしました。その結果、上位 10 種の樹木が本数の 70％を占めていることから、植栽に偏りがあることが判明しました。調査結果を藤岡市役所へ報告し、植栽の多様性について提案を行いました。

②バリアフリー調査

バリアフリー調査では、誰もが利用できる空間とするため車いす利用者を想定した調査活動を実施し、段差や出入り口、多目的トイレの有無などを調査しました。また、車いす利用者の団体であるＤＥＴ群馬と連携した調査を実施し、実際の利用者の目線から課題を明らかにすることができました。藤岡青年会議所主催のイベン

トにて藤岡市長と対談する機会を得た際に、公園のバリアフリー化について質問したところ、現状は不十分であるとの回答をいただきました。しかし、この質問を通して公園を管轄する藤岡市役所都市施設課との情報共有につながり、すべての公園の入り口にある段差が解消されました。

写真１　公園のバリアフリー調査

③公園利用者調査

公園利用者の分析調査では、ヒューウォッチング法（公園の利用者を観察し属性や行動を記録する調査法）を用いて利用者数・年齢構成・利用方法などを調査し、公園利用の実態を明らかにしました。藤岡市にあるすべての都市公園を対象に調査を実施し、結果として利用者は午前中に集中している点や、利用形態のほとんどが散歩や休憩ということが判明しました。また、利用者の年齢層が 10 代以下と 60 代以上で 70%を占めたことから、幅広い年齢層の利用に向けた方策が必要であると考察しました。

２）　桜山公園調査活動

①ＰＲ動画の制作

桜山公園の魅力向上に向けた動画制作では、地域の方へのインタビューや病害により減少が続く冬桜の保全活動について取り上げました。制作動画は「第１回ネイチャー甲子園動画クリエイト部門」にて初代グランプリに輝き、地域の自然を保全する活動が高く評価されました。

②バリアフリー調査

バリアフリー調査では、藤岡市の桜山公園にて令和３年に改修が行われたスロープの勾配調査を実施しました。調査の結果、法律の基準（８％勾配）を超える勾配であることが判明しました。具体的には、入り口のスロープの勾配が 20.8%であり介助者ありでも登ることが困難な状況でした。また、展望台までのスロープの勾配が 11.4%であるため、車いす使用者が利用できない設計となっていることが明らかになりました。さらに、バリアフリー化に向けて公園には身体障害者用の駐車場が設けられていましたが、本来であれば平らな駐車場であるべきところが 8.4%の勾配となっていました。こうした調査結果を踏まえて、だれもが利用できる公園とするため車いす利用者でも利用できる展望台の提案など、行政と連携した活動を行っています

３）　藤岡市公園づくり協議会の設立

令和６年度より新たに実施した活動でありこれまでに３回実施しています。今年度は５回の実施を計画しており、藤岡市の公園づくりにおけるプラットフォームの構築に向け取り組んでいます。

写真２　公園づくり協議会の様子

５　成果と今後の課題

１）　成果

○　この調査活動は、全国の農業高校が加盟する日本学校農業クラブ連盟のプロジェクト発表部門で発表を行い、令和５年度は県大会・関東大会で最優秀賞を獲得し全国大会に出場することができました。

○　日々の活動を通して、主体的に取り組む姿勢や地域や専門家と連携する中で自己有用感や達成感を高めることができました。また、地域のイベントにて研究発表や展示を行うなど、地域の方への周知活動を通して、生徒がそれぞれ地域のために行動するということの魅力や意義などを理解することができました。

○　公園調査活動で得た知識や課題を題材とし、「第 51 回全国造園デザインコンクール」に作品を提出し、最高賞である国土交通大臣賞を受賞することができました。令和５年度においても国土交通大臣賞を受賞しており、２年連続の最高賞を獲得するなどこの研究活動が大きな成果につながりました。

２）　課題

○　本活動を通して、日頃の学習成果を応用した活動を展開することができ、さらに生徒の主体性を大きく育むことができました。しかし、そうした大きな教育効果の背景には長期的な計画の立案や外部との連絡調整、放課後及び休日の課外活動など多大な時間と熱意の上で成り立っていると改めて認識することができました。特色ある教育活動を一過性のものではなく持続可能な教育システムとするためには、学校全体の理解と常に学び続ける教職員の育成が重要であると考えています。

○　今日、地域連携は学校と地域を結ぶ重要な要素であると考えられており、実際に多くの教育的成果につながっています。実際に本校ガーデニングコースでは、藤岡市役所をはじめ藤岡青年会議所や前橋工科大学・東京農業大学など多様な主体と連携した活動を実施しています。しかし、教職員の人事異動によって連携活動の発展や衰退があるのが現実です。多くの連携活動を通して、持続的なものとするためには「目標・目的の明確化」や「長期的な計画の立案」などをより高いレベルで取り組まなければならないことが課題として見つかりました。

○　公園調査活動を通して、身近な緑地である公園をフィールドに現況調査やバリアフリー調査などの実施をはじめ、地域と連携した生徒主体の協議会の運営などを行いました。今後の課題として、これまで培ってきた知識やデータを活用して「藤岡市の公園のあり方を変える」端緒となるべく、引き続き活動に取り組んでいきたいと考えています。